



ご本部へ行こう！ 正門

大正14年の大教会所炎上にも焼け残りしました

教会月報

あつた

金光教熱田教会

No.739 2020.7

メール attakai@nifty.com

<http://attakai.life.cocacn.jp/>

たかが野球 されど野球

教会長

六月十九日、今シーズンのプロ野球がやっと開幕した。私を含めてこれを待ちわびていた人は多かっただろう。興味のない人にとっては、「たかが野球」であろうが、野球の好きな人にとっては、ここまで何ヶ月か、観戦のない毎日が寂しく、新聞のスポーツ欄のなんとつまらなかつたことか。ましてや野球選手として技術を研いでいる野球少年、高校球児らにとっては、野球のできない辛さはいかばかりだったろう。甲子園大会が春も夏も中止になり、彼らにとっては生きがいも失ったに等しい。そしてさらに、野球を生業にしている人たちにとっては、生活に直結して命に関わることだ。「されど野球」なのである。

日本では野球は、やったり観たりするのが当たり前だと思っていた。しかしそれは当たり前ではなかつた、コロナ禍で気づかされた。

幸い高校野球では、八月に春の選抜甲子園大会出場校が甲子園で、一試合だけが試合ができることになった。また夏の甲子園大会は中止となったが、各県の高校野球連盟が地区大会を計画し、愛知県でも先日始まった。なんと嬉しい報せでは

ないか。関係する大人たちの努力に感謝したい。欲を言えば、各県の優勝校で、一試合ずつだけでも、甲子園でプレーできないものかと思うのは私だけか。

しかしプロ野球はまだ無観客試合である。柔道や相撲、空手、レスリングなど接触して行わなくてはならないスポーツは、まだ練習すら難しい。当たり前にしてきたことが、当たり前にできないのは辛いものだ。

「当たり前でない」「当たり前前にできない」と気づいたことはいくつだが、気づいただけでは足りない。そこから何をどう踏み出すか。「たかが〇〇」とどまったり切り捨てたりしたのでは、それを生きがいや命にしている人は浮かぶ瀬がない。「されど〇〇」と、何としても回復、復旧、復興しなくてはならないと思う。

考えてみれば、人の生活に関わるものは、ほとんどが「たかが〇〇」「されど〇〇」なのだ。とすれば「たかが〇〇」として片づけず、「されど〇〇」と喜んで、ありがたく何事もさせていただければと思う。

コロナ禍で、『当たり前前だと思っていたのに…』と気づかせていただいたことは多い。信行期間に入って、この際これをまとめておこうと提案して取り組んでいる。忘れないうちに書き留めて、これを後に生かそう。「されど〇〇」として。

大切な話三題

誰でもができる働き

前芝教会長 故大場正範師

とかく私たちは、助ける働きという、手間ひまかけてのものと大げさに考えがちです。確かに、手間ひまかけてしなければならぬこともあります。しかし「無財七施（むざいななせ）」という言葉のように、誰もが、いつでも、どこでも、また、どんな方法、手段でもできさせていただけることが、そこにもここにもあるのです。ないのではなく、しないのです。

また「私のような無信心者には、とても、とても」とか「自分の頭の高エを追うので精いっぱい。他人のことなど、とんでもない」とか「もう少し心や生活にゆとりができてから…」もうちよつと信心が進んでから…」とか言う人があります。一見謙虚のようであって、その実、

なすべきことをなさぬ怠慢、生きることに不誠実と言わねばなりません。「いつかできる時がきたら…」という人には、永久に「できる時」はないでしょう。助ける働きは、特別の人の特別の行為ではありません。老いも若きも幼きも、その気その心があれば、できさせていただけのことです。

「小さな親切運動」というのがあります。私はその「小さな」というところがミソだと思えます。「大きいことはいいことだ」といったテレビのコマーシャル・ソングがありますが、大きいこともいいことかも知れませんが、小さいこともいいことです。小さいことをおろそかにして、大きいこともできません。温かい笑顔で人に接する、肩をたたき声を掛ける、病室の人に慰めの手紙を送る、心悩める人に励ましの電話をかける…いずれも手間ひまからぬ、小さい身近なことです。それをやらせていただくのです。

ある人は毎朝、自分の家の近くの道路を掃くことを日課としています。掃く範囲は限られています、その

人の思いとしては、この道は東京中に通じ、日本中、世界中に通じている、私は今、東京を掃き、日本を世界を掃いているのだ…という思いなのです。

これも些細な行為のようですが、素晴らしいことです。その人は道を掃くとともに、わが心の中をも掃いていらつしやるのだと思えます。いずれにせよ、まず手もと足もとから、できることからです。要は、やる気やる腰です。

『大場正範教語集』から

杵に収まらない教祖様の教え

柏原教会長 青木 洋師

入院生活の中で気付かされたことが二つあります。もちろん、食事をするにあたっては、今まで以上にありがたく頂くようになりました。そして、食前訓をあらためてお唱えしながら、「これまで、なんと口先だけの食前訓だったか」と思いました。

そんな時に思い出したのが、八年ほど前の教区の「教師子弟の集い」での出来事でした。淡路島にある青少年の家で開催したのですが、立派な施設で四〇〇人ほど宿泊でき、食堂も一度に二〇〇人以上が入れるほどでした。食事の時間が決められ、時間をずらして団体が次々に入っていきます。私たちは三十人程度でしたが、食堂に行った時に、まとまって座れる場所がなく、分かれて座りました。各班でそれぞれ食事訓を唱えたのですが、まったく別の場所から「食物はみな人の命のために天地乃神の造り与えたまうものぞ…」と聞こえてきて、みんなが一斉にそつちを見ました。

すると、二十人ほどの若い女の子の団体が、みんなで食前訓を唱えていたのです。私はすぐに、「あつ、これは本教の関係の学校に違いない」と思つて尋ねると、「〇〇中学校です」と答えます。けれども、私が知っている本教の学校ではありません。私は思わず、その団体に「すみません、先ほど食事の前に皆さんで唱えていた言葉は何ですか？」と聞きま

した。すると、キャプテンらしき子がすくつと立って、「〇〇中学校女子ソフトボール部の伝統です！」と即座に答えてくれました。

その時に、いろんな思いがしました。教会の先生方の子どもさんを預かって集会をしていながら、自分たちは小声で食事訓を唱え、宗教とは関係のない団体が、大きな声で食事訓を皆でそろって唱えていたのです。しかも、それが部活動の伝統になっており、誰がお伝えになったか分かりませんが、すごいことだと感激しました。何よりも、教祖様のみ教えは、われわれ金光教の仲間だけの教えではないということです。この世の中の、人類のためのみ教えを教祖様は残してくださっている。それを見せていただいた、聞かせていただいたような気がしました。

もう一つは、教祖様のみ教えはい

ろいろとありますが、基本的には、天地の親神様のお恵みとお働きを大切にすることを教えくださっている、あらためて感じました。

教報「天地」5月号から

自分自身の花

常盤木教会長 原田恵一郎師

五月病から鬱になった方が、「先生、もう私はダメです。もうしんどいです。何もかもが嫌になり仕事も辞めたいです」というようなことを言われました。

私はそれを聞いて真剣に願わせていただいたときに、私自身が挫折して津田先生(尼崎前教会長)に教えていただいたことを思い出したのです。

私もよく挫折します。自分は何とダメな人間なのだろう。金光教の教師にも、やはり学問や教養は必要だ。学歴も何もない自分は、お役に立てないのではないかと思ひまして、悩

んだことがあります。その時、私はお結界に行きまして、津田先生に申しました。

「私には金光教教師は務まりません。津田先生は立派だけれども、私はダメです。」そしたら先生が、「恵一郎君、あんたはあんたとして神様から頂いている花がある。自分の花を精いっぱい咲かすことに力を入れたい。津田貴雄は津田貴雄としての花がある。あんたはあんたとしての花がある。その花を咲かすことに一生懸命にならせていただきなさい。」

これはあの五人グループのスマツプの「世界に一つだけの花」という歌調を真似て言っているように聞こえるかも知れませんが、確かに津田先生ご自身のお言葉です。

「他の花を見ることはない。あんなにないものが私にあるし、私になんものがあんたにはある。」

さらに、人間の値打ちを分数にたとえて、

「私が仮に一〇の力を神様から頂いているとしても、五しか現していません。でも恵一郎君が

もし、五の力しかもらってなくても、三を出したら六〇%で、そのほうが立派だ。分母を問題にするより、分子を見なさい。いかに努力するかが大切です。

人間は一人ひとり、いろんな性格や能力を神様から頂いている。あんたは素晴らしい性格や、いろんなよいものを持っているから、何も悩むことはない。今の今、神様から頂いているそのおかげを生かして、一生懸命努力さしてもらったらそれでいい。」

こういうことをおっしゃいました、それを私はすうつと、事あるごとに思い出します。

二〇一五年「お年玉」金光出版より

お礼を土台に

鈴木輝夫

上半期、無事に命をいただき有難いことでありました。半年という月日は長いようで、短く感じました。たくさんの気づきを神様がくださったことを感謝しています。

人間は忘れる生き物です。昨日の夜ご飯は覚えているけれど、一週間前の夜ご飯は忘れてしまっています。私はちよつと嫌なことがあっても、寝れば忘れます。それくらい私は忘れる生き物で単純です。

さて、七月は夏の信行期間になります。皆さん、新型コロナウイルスのおかげでたくさん気づいたことがあると思います。その気づきを信行手帳に書き出して、改めてその気づきにお礼を申し上げます。

ご本部に三ヶ月ぶりに参拝させていただきます。ある先生とお話しする機会がありまして、教会のこ

ろ相談にのってもらいました。そこで、先生は「お礼を土台にせなかな。人やものを見るのではなく、神様に目が向いてない。だから、苛立ちや不満が出てくる。神様へのお礼を土台にすれば変わってくる」と言われて、本当の意味で「お礼を土台に」という言葉が分かっていた。頭や言葉では知っている、理解しているつもりでも、体や心から本当の意味をわかっていないのだと突き付けられた気がしました。

私は迷いや不満などがあるときに、いつもここぞというタイミングでご本部に参拝する機会があり、そのときに会った人や出来事で迷いが解消され、心が軽くなつて帰ってくることでできています。私はご本部の、神様のご比礼を目いっぱい受けているのだと、その都度実感します。これから、本当の意味での「お礼を土台に」ということを求めて、日々の御用や生活の中で、たくさん気づき、改め、神様にいっぱいのお礼をできるようにしていきます。

ご霊地より

2020年も半年が過ぎました

原田義子

今年正月に私が頂いたみ教え短冊は、『信心する者は犬猫にまで憎まれぬようにせよ。また犬猫にまでも敵をこしらえるな』でした。

寮の部屋の天地書附の隣に置いて、いつでも見られるようにしています。よく目につくので、私はいつも眺めて、このみ教えを頂いた意味を考えます。半年が経って半年を振り返りながら、改めてみ教え短冊を頂き直していました。

学院生のときにもらったみ教えでも感じたのですが、『なんでこのみ教えなんだろうか』と、今年も考えさせられていました。特に、頂き直そうと思つてからのここ最近、モヤモヤが増すばかりでした。

そんなある日の夜御祈念の教話で、気づかされることができました。

それはまったく違うみ教えを頂いての教話でしたが、生き物に対しての話で、私はそれを聞きながら、毎年この時期に猫に悩まされていたことを思い出しました。

なにも対策をしないと一つ仕事が増えるので対策をする。そうすれば未然に防ぐことができる。しかし、これは私にとってはメリットだが、猫にとつてはどうなのか。その対策によつて、その猫は他の人を困らせはしないか、と考えると正直何が正しいのかわからなくなります。

ということで、私は猫を敵と思っているんだなあと気づかされました。そこで私は、対策はするけれども猫のことも元気で育つように願つてあげることが大事なことではないかと、先生の話聞いて気づかせてもらいました。

そして、このみ教えのことを考えることによつて神様に心向ける稽古をさせてもらっているんだと、それがみ教えを頂いていくことの一歩大切なことなんじゃないかと、改めて感じさせていただいた半年の節目でした。

左から熱田区消防団長、教会長、
まちづくり委員長、町内会長



○二十九日当教会は「地域防災協力事業所」として「高蔵学区防災安心まちづくり委員会」と大規模災害時における支援協力の覚書を交わした。熱田消防副署長、署員、まちづくり委員長、町内会長の出席も得た。(写真)

地域防災協力事業所に認定

「社会に開かれた教会に」と取り組んできている私たちとして、新たに名古屋市に申請して「地域防災協力事業所」の認定を受けました。

緊急かつ大規模災害時に、何か地域のお役に立つことはできないかと考え、今回の申請、認定となったのです。

協定の内容は、

- ① 大規模災害時に駐車場、一階広前、四階ホールを一時避難所として提供すること。
- ② ジャッキや机、イスなどの教会の資材を貸し出すことなど。

立派な認定標識を頂戴しました。(左)

このことには、在籍のご信徒の協力が不可欠です。何卒ご協力をお願いします。

